

オリジナルオペラ 『二天の橋』 (台本A)

渡部 成哉
千葉大学・教育学部

Original Opera "Bridge Across Two Heavens" (Libretto A)

WATANABE Seiya
Faculty of Education, Chiba University, Japan

平成二十七年十月、成田市文化芸術センター スカイトウンホールにおいて初演されたオリジナルオペラ 『二天の橋』の最初の台本である。

キーワード：オリジナルオペラ (Original Opera) 台本A (libretto A) 初演 (the first performance) 成田市 (Narita City, Chiba)

オリジナルオペラ 『二天の橋』

人物

男蜘蛛 (男蜘蛛の魂魄)

朱身 (女蜘蛛)

若者 (知彦)

旅の僧

地謡

(鰻搔きの男を含む)

(土地の何某を含む)

〔「ト若者」・「ト朱身」のごとく、役名の前に付された「ト」は、それらが同時に歌われる可能性を含む重唱部分を示す〕

地謡 世を捨て人「びと」の旅の空、世を捨て人の旅の空、
来し方いずくなるらん。

ト、旅の僧、舞台下手より出る。

地謡 げにや故郷は雲居のよそ、

旅の僧 変る世なれやわれひとり。

ト、旅の僧、高台にある大杉の元にたどり着き、汗を拭拭いつつ、
眼下に広がる沼を望みながら、

旅の僧 大きな川だ。

ひと休みしたら、

陽の暮れぬうち、

あの川を越えようか。

山を越え、水を渡って、

進むとしよう。

地謡

ト、この時、鰻搔きの男、祭囃子のごとき音楽に乗り、滑稽な仕草

旅の僧 で通りかかる

旅の僧 その人……
 鰻搔き (搔き棒を取り落としそうになりながら) わしのことかいの?
 旅の僧 少々ものを訊ねるが……
 鰻搔き (おどけた調子で) ちよつくらものを訊ねられるが……
 旅の僧 あの川を越えたいのだが。
 鰻搔き (辺りを見回しながら) あの川、あの川、どの川だ?
 旅の僧 ほれ、あの大きな川をじゃ(ト、杖で沼の方を指し示す)
 鰻搔き 坊様よ、あれは川ではねえ。
 旅の僧 川ではないとな。
 鰻搔き 《印旛の》沼じゃよ、あれは。
 旅の僧 沼か……
 鰻搔き (得意気に拳で鼻をこすりながら) でっかい沼じゃろうが。川に見えてもあたりまえ、あたりまえ。
 旅の僧 橋はどこかの?
 鰻搔き 橋?(いつそう驚いて) 橋なんぞないわな。
 旅の僧 橋は架かってないのか?
 鰻搔き 端から端まで(ト、棒で半円を描いて)、橋はない。
 旅の僧 運が良ければ小舟もいようが……
 鰻搔き 小舟がなければ?
 旅の僧 沼をぐるっと一回り。
 鰻搔き やれやれ……
 旅の僧 右へ回るか(棒を背に負い右へ回転)、(さらに棒を負い直して) 左へ行くか……
 鰻搔き 沼をぐるりと、
 旅の僧 一回り、
 鰻搔き 右へ回るか、
 旅の僧 左へ行くか……
 鰻搔き ここが思案のしどころか。
 旅の僧 ここが思案のしどころじゃ。
 鰻搔き 坊様、(ト、棒を地面に突き立てる。世話にくだけて) 気をつけて行

地 謡

旅の僧 かつしゃれや。
 地 謡 ト、ふたたび祭囃子のごとき音楽に乗り、陽気に上手へと退場する(くり返すように) 右へ回るか、左へ行くか……
 旅の僧 すでに夕陽「せきよう」西に移り、
 地 謡 山峡の蔭すさまじくして、
 鳥の声かすかにものすごき、
 旅の僧 ト、舞台一面が薄暗くなり、僧の背後に土地の男の姿をした男蜘蛛が音もなく立っている
 男蜘蛛 旅の人……
 旅の僧 (やや驚いて振り向き) わしのことか?
 男蜘蛛 (感情のない声で) 沼を越えたいとか……
 旅の僧 だが橋も渡しもないと聞く。
 男蜘蛛 そのとおりだ……
 旅の僧 さて急ぐ旅ではなし、ぐるりと一回りして先へ進もうかの(ト、立ちかける)。
 男蜘蛛 (さらに感情を殺して) 橋が欲しいか…… 欲しくば架けようか…… 何と?
 旅の僧 橋を架けてやろうか、と言ったのだ……
 男蜘蛛 出来るのか、そんなことが?
 旅の僧 出来る。おれの妹は、見事に橋を架けてみせたぞ。
 男蜘蛛 不思議な話だ
 旅の僧 橋が要るなら、架けてやろう。
 男蜘蛛 代わりに頼みたいことがある(ト、下手の粗末な小屋へと誘う)。
 旅の僧 (ほぼ独言のように) 橋を……すぐに……
 男蜘蛛 とても人とは思われない。
 旅の僧 いったい何者なのだろう?
 男蜘蛛 (思い直して) どうせ野宿をするならば、
 旅の僧 ここで一夜「ひとよ」を明かしてみるか。
 男蜘蛛 よしや旅寝の草枕、
 旅の僧 今宵ばかりの仮寝せん。

ト、男蜘蛛に導かれ、二人は下手端にある囲炉裏の前に腰を落とす。
主舞台は空けること。

男蜘蛛

妹たちの供養を頼みたい。

旅の僧

供養も出家の仕事だが、

妹「たち」とは？

男蜘蛛

（先ほど僧の休んでいた大杉の方「かた」を示しながら）杉の大木を見
たか？

あの木の下に妹たち二人がいる。

旅の僧

そこに二人を葬ったと？

男蜘蛛

葬ったのではない。自ら入って戻らぬのだ。

長い話になるぞ（囲炉裏に木ぎれをくべる）。

大雨の降る晩のことだ、

沼を越えようとした若者がいた。

（僧の問いかけを封ずるように）理由「わけ」は知らぬが、

ひどく急いでいた。

ト、話すうち、囲炉裏の火が弱くなり、消えそうになる。

男蜘蛛

薪「たきぎ」が心細い。集めてこよう。

ト、ともに行こうとする僧を押しとどめ、男蜘蛛は外に出て、静か

に退場する（次の登場までに衣裳、化粧を改める）。

旅の僧

ますます訳がわからない。

大雨の夜に、若者が……（とくり返しているうち、次第に眠りに落ち

ていく）

地謡

野風山風吹きすさび

鳴神稲妻天地に満ちて

空かき曇る雨の夜に、

ト、箕笠をつけた若者、風に押し戻されるように舞台に駆け込んでく

る。沼の方角をふり返りながら、大杉の下で雨をしのごうとする。

若者

山を越え、

野を横切り、

昼もなく夜もなく、ずっと歩き続けてきたのに、

行く手を川に阻まれて、先に進めない。
早く、

早く川を越えなければ。

早く……

でも、この嵐の中、どうやって……

ト、箕笠をつけた土地の男・何某が、櫂を肩に担いでやって来る。

若者、その前に飛び出す。

（ひどく驚いて）なんだ、いきなり……

この川に橋は？

川だと？（早くも察して）沼のことか？

橋などあるものか。

（何某の担ぐ櫂に気づいて）あなたは漁師か？

ならば舟を出してはもらえませんか？

お礼は必ず……

馬鹿を言うな。

この雨に、この風だぞ。

金より命が大事だわ。

こんな晩、沼に出てみる二人とも、

水に沈んであの世行きだ。

夜が明けて、

嵐がやんだら行けばよいわな。

それでは間に合いません。

知ったことかい。

ではどうしても？

くだいわな！（と言い捨て、逃げるように退場する）

（何某の後を見送り、しばらく立ちつくしていたが）橋もなく、舟もない。

さて、どうすればいいだろう……（ト、その場に座りこむ）

（意を決したように）泳いで渡るか、

ト、沼の方角へ走り出そうとするが、強い雨風に押し戻される。

やはりだめか……

地謡 梢の嵐吹きしをり、
雲となり、雨となる。
ト、舞台上に繰り返し稲妻が走り、若者の背後には男蜘蛛が音もなく現れている。旅の僧に見せた姿とは違い、精悍な立ち姿である。
沼を越えたいのか？（若者、うなずく）
急ぐのか？（若者、うなずく）
何用あつて急ぐ？（若者、首を振る）
では諦めろ。
若者 もしや沼を越す手立てをご存知なのでは？
男蜘蛛 知っている。
ト、男蜘蛛が何かを口にするが、激しい雷鳴に遮られ、若者の耳には届かない。若者、男蜘蛛に聞き返す仕草。
地謡 山河草木振動し、
天に輝く稲光、
大地に響く雷「いかづち」は、
肝魂をくらまかす。
男蜘蛛 眼だ。
おまえの眼玉と引き換えに、
沼を渡してやろう。
若者 どうやって沼を……？
男蜘蛛 橋だ。
おまえの眼玉と交換に、
橋を架けてやろう、というのだ。
若者 （はっと気づいて）この雨に、あなたの着物は濡れていない。
なぜだ？
あなたはいったい……
ト、この時、女蜘蛛の朱身登場。
朱身 どうしたの、兄さん……
若者 どなたです？
男蜘蛛 朱身、おれの妹だ。

若者 朱身……
（我に返って）あなたの着物も濡れていない。
もしかして……
我ら兄妹「きょうだい」人ではない。
だが、それ以上は訊ねるな。
若者 人ではない……
（突然地面に手をついて）朱身さま、
わたしの名は知彦。
どうしても、どうしても沼を越えたいのです。
朱身 知彦……
沼を……
若者 お願いです。
ト、朱身と若者、互いを見つめる。
行くぞ、朱身（ト、その場を立ち去ろうとする）。
若者 （あわてて）待って下さい、待って……
朱身 待って、兄さん。
話を聞いてあげましょう。
男蜘蛛 物好きな、放っておけ。
朱身 兄さん、
知らないと言うなら、
知って欲しいのよ。
他人を思いやることは、
人のためではなく、
自分のためだということを。
思ひ知らずや世の中の、
情は人のためならず、
必ず身にも報ふなり。
男蜘蛛 好きにしろ。
だが、掟はけつて忘れるな。
ト、言い捨てて退場。朱身と知彦が残される。

朱身 沼を越えたいと？
 何のために？
 若者 大事な約束が……。
 朱身 （やや強く）女の方との？
 若者 （若者、顔を赤らめ、強く否定するそぶりです。）恩ある方との大事な約束です。
 朱身 それではあなたは、
 眼「め」をなくしても行きたいと？
 若者 はい。
 しかし、しかし、眼をなくしては、
 この先旅が出来ません。
 往って五日、戻って五日、
 どうか十日お待ち下さい。
 必ず戻って参ります。
 ト、朱身、意を決したように、
 まもなく嵐は収まります。
 空に月が戻り、
 青白い月明かりに虹が輝くその時に、
 糸を絡めて橋にします。
 嵐が止むと、
 空に月が戻り、
 青白い月明かりに、
 虹が輝くその時に、
 糸を絡めた橋になる。
 糸を絡めて橋にする。
 虹の橋……。
 糸の橋……。
 今です！
 ト、朱身の手の内から蜘蛛の糸が放たれると、沼の上に橋が出現する。
 さあ、早く。

虹が消えないそのうちに、
 心をまっすぐに渡るのよ。
 明日「あした」の夜明けが来る前に、
 今夜の虹を駆け抜けて。
 早く、早く。
 若者 必ず戻って参ります。
 ト、一声叫ぶと、橋を渡り始める。
 ト、時を同じくして、土地の男・何某が登場。
 雨は止み、すでに簑笠を外している。
 何某 やれやれ、ひどい嵐だったな。
 ト、舞台中央に進み、虹に絡まる橋を見つけ、
 何某 何だ、あれは……。眩く光って、なんと美しい！
 ト、橋に近づき
 何某 やっ、これは橋か？ 沼を渡る橋か……。いつの間に……。ひとつ渡ってみるか。
 ト、懼を放りだし、橋を渡ろうとする。
 朱身 だめ！ それは知彦の橋。
 やめて！
 戻って！
 ト、何某に朱身の声は届かない。
 朱身 橋が消える！
 危ない！
 ト、橋はこちらの岸から向こう岸に向け、次第にその色を薄めながら消えていく。
 何某 あーっ！
 ト、沼に向けて転落していく。
 朱身 （やや冷たく）愚かなこと……。
 漁師ならば、
 泳いで岸に向かうがいいわ。
 ト、伸び上がって向こう岸を見つめる。若者の姿を目で追いながら、

地 謡

渡りきったのね、知彦。
こちらに手を振っている。

さあ、急いで、急いで行って。

夜を忘れ、昼を貫いて、急ぐのよ。

十日の後「のち」には必ず戻って。

たとえあなたが眼「まなこ」をなくしても、

あたしはあなたの側にいるわ。

行って、知彦、行って！

ト、この時、男蜘蛛が舞台に戻り、朱身を責める仕草のうち、音楽

さらに高まり、幕。

ト、幕が開くと、大杉の元に男蜘蛛と朱身の兄妹がいる。すでに陽
が暮れかけている。

もとより蜘蛛は日陰の身、

人の姿を借りてはいても、

この世の中とは関わらず、

人との交わり、

人の手助け、

すべて許されはしない。

糸を放って知彦を、

沼の向こうへ渡した朱身。

約束どおり知彦が、

戻って来ないその時は、

根の国深く追いやられ、

ふたたび地上に戻る日はない。

戻らんな、知彦は。

男蜘蛛

騙されたのだよ、人間に。
言ったではないか、

話は聞くな、放っておけと。

おまえを独りにすべきでなかった。

後悔してもしきれない。

言わないで、兄さん……

待ってみましょう、もう少し。

約束までは、まだ間があるし、

あたしは知彦を信じているわ。

奴が戻らなければ、おまえは……
その話はやめて。

(さらに言いつのる) おまえは追放だぞ。

(ほとんど絶叫のように) やめて。

刻限までに知彦が、

ここへ戻って来ないなら、

明日の夜明けを見ることはない。

なぜ知彦に手を貸した？

眼「め」よ……

眼だと？

身なりは貧しくても、

知彦の眼は、とても澄んでいた……

それで沼を渡してあげたの。

だから兄さん、

知彦が戻っても、

眼を奪うのはやめて。

それはできない。

それが掟だ。

それが決まりだ。

助けて、知彦を。

だめだ、だめだ。

だめだ、だめだ。

朱身

男蜘蛛
朱身

男蜘蛛
朱身
地謡

男蜘蛛
朱身
男蜘蛛
朱身

♪朱身

♪男蜘蛛

♪朱身

♪男蜘蛛

朱身

ト、朱身は絶望し、地面に伏して激しく泣いたあと、身を起こし、静かに歌い始める。

覚えている？ 兄さん、楽しかったわね。

小さな子どもだった時、

風に乗って空高く、

舞い上がったあの日のことを。

みんな散り散りになったけど、

兄さんとあたしはここに降り立った。

小さな子どもだった時、

見なくていいものを見ることはなく、

知らなくていいことは知らなかった。

あさましい蜘蛛と蔑まれても、

生きてこられてよかったわ。

蜘蛛も人も、この世にいる時は

そんなに長くはないのだから……

朱身…… 朱身……

ト、男蜘蛛の呼びかけに、地謡が絡んでくる

地謡

朱身！

朱身！

時が来たぞ、

朱身！

ト、轟音とともに、大杉の周りに穴が開いていく。

見ろ、杉の根元が開いていく！

さようなら、兄さん……（ト、根の国の入口に近づいていく。）

朱身、待て、朱身！

知彦が戻っても、

眼を奪うのはやめてね、兄さん……

ト、朱身は微笑を残すと、大杉の穴に進み、根の国へと下って行く。

男蜘蛛

何ということだ、朱身！

ト、この時、若者が舞台に駆け込んでくる。その衣服には血がにじんでいる。

若者

朱身さま！

朱身さま！

男蜘蛛

ト、男蜘蛛、若者に駆け寄り、その胸ぐらを激しくつかんで、

なぜ朱身との約束を守らなかった？

なぜ！

若者

許して下さい。

身に覚えのない疑いを受け、

牢屋につながれていましたが、

約束を守るため、

やっとここまで逃げてきました。

（沼の方向をうかがうようにして）

追っ手も、そこまで追っていきましょう。

朱身さまはどこに？

男蜘蛛

そこだ（杉の根方を指さす）。

若者

ト、若者、男蜘蛛の言葉を理解しかねつつも、杉の根元に近づく。

男蜘蛛

そこ、とは？

男蜘蛛

ト、若者と男蜘蛛が、杉の木を挟んで対峙するかたちになる。

男蜘蛛

この下だ、朱身は。

男蜘蛛

人の姿は仮のもの。

男蜘蛛

おれたちは蜘蛛だ。

男蜘蛛

おまえが戻って来ないから、

男蜘蛛

人間に手を貸した朱身は、

男蜘蛛

地中に追放されてしまった。

男蜘蛛

人と交わってはならぬ、

男蜘蛛

人と心を通わせてはならぬ、

男蜘蛛

……朱身は掟に背いてしまった……

ト、若者が杉の根方を覗きこんでいると、朱身の声が聞こえてくる。

朱身
若者

来てくれたのね、知彦……
朱身さま…… わたしも参ります。

ト、わずかに開いた隙間に身体を入れた瞬間、若者も地中に吸い込まれていく。

若者

朱身さま！

朱身

知彦！

若者

眼を、眼を差し上げます。

朱身

今となつては無用のこと。

若者

朱身さまとの約束が……

朱身

約束は果たされました。

若者

わたしの眼には、あなたが見えている、朱身さま……

朱身

知彦、あたしもよ……

若者

朱身さま！

朱身

知彦！

ト、舞台一面が薄暗くなり、まどろむ僧の背後に男蜘蛛が立っている。僧は男蜘蛛を見ることなく、あくまでも夢の中で話している心にて、

こうして、朱身と知彦は去った……

死んだのか？

わからない……

では生きていると？

それを知る術「すべ」は、おれにはない……

おれはここにとどまった。

根の国よりも暗いこの土地で、

眼だけが異様に輝いて

鬼のように見えたとしても、

もはや人には見えないだろう。

ト、この間に空がほのかに明るくなり、夜明けが近づく。

月日も見えず暗きより、

暗き道にぞ入りにける。

昔語になりし人の、

地謡

男蜘蛛

なほ執心は残りけん。

体は冥途にありながら、

心はこの世に留まって、

消えた昔の物語。

蜘蛛には神も仏もないが、

おれのためにも祈って欲しい。

朱身の信じた月のように、

おれを照らしてくれるなら、

二天の橋となるだろう。

(眠りから醒めた様子で) 夢を見ていたのか？ ……それとも……

夕々「ゆうべゆうべ」の仮枕、

宿はあまたに変われども、

かくて時過ぎ、頃去れば、

まことは夢の中「うち」なれば、

皆消え消えと失せ果てて、

眠りの夢は、覚めにけり。

ト、この時、鰻搔きの男、再び祭囃子のごとき音楽に乗り、滑稽な

仕草で通りかかる

ありや、坊様、

夜が明けたというに、

まだおられたのかいな？

右へ回るか、左に行くか、

まだ決まらんのかいな。

(それには答えず) あるいは長い夢を見ていたのか……

坊様は気楽でよいな。

わしらは、毎日毎晩疲れ果て、

夢など見たこともないわいな。

悟りをひらいた聖人は夢を見ない、

と言うが、

夢見るほかない凡人でさえ、

旅の僧

旅の僧
鰻搔き

鰻搔き

旅の僧
地謡

誰がこの夢を現実だと思うだろう（言いつつ、ゆっくり立ち上がると、大杉のもとに寄って行き、木を見上げ、ややあつて杉の木の根方に向けて経を唱え始める）

法界衆生平等利益……

地謡 法界衆生平等利益……

鰻搔き 誰かの供養か？（と言いつつ、僧の姿と地謡の声に圧せられて手を合

わせる）

ト、一羽の鳥が鳴き声を残して飛び去っていく。僧、空を見上げ、

その後を見送る仕草。

地謡 法界衆生平等利益……

旅の僧 人にも翼があるならば、

沼でも山でも自在に越え、

願うところ、思うところに、

自由に行けるだろうに……

鰻搔き（僧の言葉を聞き咎めるように）人は鳥ではないわいな。

蝶でも蜘蛛でもないのだぞ。

（滑稽な調子で）もちろん鰻でもないわやい。

地謡 法界衆生平等利益……

旅の僧 人が翼を得て、自由に空を行く時が、いつか来ようぞ。

ト、この時、旅客機と思しき飛行音が舞台を圧して響き渡る。

ひえーっ（と空を見回し、首をすくめ、着物の襟を被るように走り去る）

法界衆生平等利益……

旅の僧 朱身、知彦、

土に埋もれ、

根に縛られようと、

二人の思いは、

なお脈々と生き続けるだろう。

朱身の兄よ、

この地を去れ。

去って、分別を忘れ、

思い出を捨てよ。

地謡 前生「ぜんじょう」また前世。

旅の僧 かつて生々「しょうじょう」の前「さき」を知らず。

地謡 来世なほ来世。

旅の僧 さらに世々「せぜ」の終わりをわきまふる事なし。

ト、旅のしたくを整え、しばし杉の木を見上げてから、静かに沼の

方へと降りて行く僧の姿に重ね、幕。

おわりに（付・演出と演技のための覚え書き）

その昔

冒頭に示したとおり、この台本は、平成二十七年十月十一日、成田市文化芸術センター スカイタウンホールにおいて初演された。作曲・指揮が奥 慶一氏、演出は直井研二氏による。

仮に「台本A」としたが、そう名付けられた台本が存在するわけではなく、書き上がったものから順に関係者に送って行き、それらをひとまとめにして手を入れた初稿のごときものを、便宜上「A」と呼ぶものである。

この「A」に対し、実際に上演に付された台本（「B」とする）が別にあり、その相違は、区々たる点を除き、大きく次の二点である。すなわち、

一、地謡の詞章。

「A」では、その場面にふさわしいと思われる詞章を、さまざまな謡曲から直接引用し、配置したのに対し、「B」ではその現代語訳、あるいは謡曲に典故を持たない全く別の文言を書いたこと。

例えば、幕切れの次の部分、「A」においては

地謡 前生また前世。

旅の僧 かつて生々の前を知らず。

地謡 来世なほ来世。

旅の僧 さらに世々の終わりをわきまふる事なし。(『江口』から引用)

としたものを、「B」では

地謡 前世の前には前世があり、

旅の僧 ついに過去の始まりを知ることなく、

地謡 来世の次には来世が続き、

旅の僧 また未来の終わりをすることもない。

のようにした。

男声のアンサンブルによる地謡が欲しいという要求があり、「夢幻能」の発想を借りた物語を書いたこともあって、台本後半の冒頭部分などを除き、謡曲から地謡の詞章を抜き出してそれに充てたのである。

直接の引用を行ったのは、『江口』のほか、『鶴』、『盛久』、『芭蕉』、『邯鄲』、『黒塚』、『善界』、『葵上』、『姨捨』、『杜若』であり、『実盛』、『清経』からは発想と言葉借りた。

二、鰻搔きの男の存在。

土地の何某とともに、「道化方」であり、狂言回しの役割を担わせたこの役を、「B」では全く消し去ったこと(土地の何某は「B」にも残された)。

鰻搔きの男の抹消を、私は今でも極めて残念に思っている。現実に上演された「B」ではなく、「A」をこのような形で残したいと思った理由もまたそこにある。

その式

すでに十月の上演が決まっていたこのオペラの台本について、私が台本執筆の打診を受けたのは三月末であり、四月に入って、あわただしく打ち合わせが重ねられた。

成田を舞台にするため、土地の伝説、昔話、民話の類に可能な限り目を通して、ものの、オペラの舞台を成立させるだけの内容をもつ題材が見つからなかった。

ならば、一から新たな物語をつくり出すしかない。

そこで、パソコンの裏に山積みにしてあったメモのうち

「ムーンボウ

月虹(げっこう)

満月

イグアスの滝

ももクロ」

という走り書きを元に、土地を成田に当てはめながらこの物語を書いた。

虹だけの橋ではいかにも弱く、虹を補強する何か、を考えながら、蜘蛛の糸にたどりついた。

そうした詳細の二々については、ここで稿を新たにするより、稽古に際して出演者・スタッフに配布した覚え書きを、そのまま引用するのが適当かと思われる。

その参

『二天の橋』—演出と演技のための覚え書き—

上演時間の制約もあり、いずれにせよ台本にすべて書き込めるわけではないので、構想から台本の段階に至って背後に隠されることになった設定が、ノートに多数あります。

演出および演技上の便宜のため、それらを中心に、以下メモしておきます。

【タイトルの意味するところ】

○『大字泉』によれば、「二天」の□には次の意味があります。

①二つの天体。

②《天恩と並ぶもう一つの天の意で》恩人を天にたとえていう語。

○二つの天体については地球と月です(月光に浮かぶ虹、については後述)。

○「恩人」の意味では、まず若者にとって、眼をなくしてでも駆けつけなければならぬ「恩ある方との大事な約束」の相手が、また沼を渡してくれた朱身が恩人

であり、男蜘蛛にとつては、妹たちの供養をしてくれる僧、また自分自身に対し、いわば引導をわたしてくれる僧が恩ある相手、ということになります。

○二つの世界という意味では、男蜘蛛や朱身・知彦らがいるはずの、俗な表現で言えば「あの世」と、僧や土地の何某が属している「この世」のこともあります。

【人物の名前について】

○この物語で、登場人物に明確な名前を与えているのは朱身と知彦だけです。

「蜘蛛」の文字から左側の「虫」偏を除くと、残るのは「朱」と「知」ということになります。

○朱身の兄である男蜘蛛にも、構想の段階では数種の名前がありました。

それを単なる「男蜘蛛」としたのは、以下の理由によります。

一、この物語の現在から見れば、男蜘蛛はすでに亡魂となつてのこと。

二、舞台上において、「○○」または「○○さま」などと名前を呼ばれる必要がないこと。

三、朱身と知彦という具体的な名を持つ二人の、この世では成就されない愛に主軸を置きたかったこと。

【舞台となった土地のこと】

○大杉は「麻賀多神社の大杉」を、土地の者以外が「川」とかんちがいでいる

「沼」は「印旛沼」をモデルにしています。

○ただし、現実の位置関係において、「麻賀多神社」から「印旛沼」を眼下に見ることは出来ません（距離があります）。

○物語での「印旛沼」は、むろん干拓前のそれであつて、登場人物が大河と思ひ込む規模をもっていた時代の沼を念頭において下さい。

○実際の舞台での処理がどのようになるか分かりませんが、

旅の僧 人にも翼があるならば、

沼でも山でも自在に越え、

願うところ、思うところに、

自由に行けるだるうに……

地謡 法界衆生平等利益……

ト、この時、旅客機と思しき飛行音が舞台を圧して響き渡る。

の「旅客機と思しき飛行音」は、成田空港のそれが頭にありました。

○印旛沼・麻賀多神社・成田空港、それに最初の段階まで台本にあった「鰻搔きの男」の鰻漁、これらが成田に対する私のオマージュの対象です。

【登場人物（キャスト）について】総論

○「キャスト」が、いつの間にか朱身・知彦・僧・男蜘蛛の順になっていました。

正しくは男蜘蛛・朱身・知彦・僧という配置になります。

○こういうことは、ドラマというものの構造が分かる人には分かる、という性質の問題にすぎませんが、あえて余計な説明をするなら、男蜘蛛と僧との間に交わされる劇的な緊張の中に朱身と知彦が身を置いている、という構造が、そのまま役の香盤に反映されているからです。

○以下、この順によって人物の説明をします。

【人物それぞれについて】男蜘蛛（男蜘蛛の魂魄）

○亡魂としての男蜘蛛と、回想の中で生きている男蜘蛛とは、衣裳でも、メイクでも、態度・物言いでも、ハッキリと違ってほしいと思います。

○回想中の（生きていた）男蜘蛛は、人間に対して強い敵愾心を抱いており、闘争的です。

この蜘蛛の兄妹は、生物学的な意味での蜘蛛ではなく、「鬼」がそうであるように、排除され、差別された人間である、と考えても差し支えありません。

○眼と交換に願いを叶えてやる、というのは、『大工と鬼六』系の昔話で繰り返されるモチーフです。

【人物それぞれについて】朱身（女蜘蛛）

○朱身は、知彦より二〜三歳ほど年が上、という設定で台本を書いています。

○朱身の兄は、蜘蛛の糸だけで橋を架けることが出来ます。

朱身には、そこまでの通力はなく、そこで満月に浮かび上がった虹を糸で補強する、というやり方で知彦を渡してやります。

月光に浮かぶ虹、というのは、イグアスの滝を特集したテレビ番組で見たことが

あり、月の光量の関係で、満月か満月に近い夜の現象だということだ。

知彦が沼を越えようとした夜は、ちょうど満月の夜でした。

○朱身と知彦によって歌われる地中からの二重唱は、『アイーダ』の幕切れのイメージです。

二重舞台を組んで、というのは高望みですが、地上に男蜘蛛（アムネリス）、地下に朱身と知彦（アイーダとラダメス）という三角形の構図にこだわりがあります。

【人物それぞれについてⅡ若者（知彦）】

○知彦の身分は「郷士（ごうし）」のようなものを前提にして書きました。

郷士は江戸時代の半士半農の、この場合は武士ですが、物語が江戸時代のものである、ということの意味しません。

○「恩ある方との大事な約束」と知彦が表向き言う内容は、政治的な密命だと考えて下さい。

彼はこの密命の完遂には半ば失敗し、政敵に捕らわれてしまいます。

「往つて五日、戻つて五日」、「十日お待ち下さい」という約束を守るために破獄し、追っ手を振り切りながら、朱身のもとへと向かったのです。

○台本を書きつつ、私の頭から離れなかった上田秋成『雨月物語』中の「菊花の約」を読まれると、ヒントがつかめるかも知れません。

【人物それぞれについてⅢ旅の僧】

○いわゆる諸国行脚の旅僧です。

修行の積み重ねによって、かなりの法力を身に付けた人物、と思つて下さい。

○身なりは貧しく汚れていても、一廉の人物になりえている。

朱身が知彦の人となりを見抜いたように、男蜘蛛は一目でその点を見抜いたからこそ、妹たちの供養と自らの解脱を、この僧に託そうとするのです。

○劇中で眠りに落ちていく僧は、言うまでもなく惰眠をむさぼっているわけではありません。

死から見た生のドラマが、僧の夢を借りて再現される点にこそ、「夢幻能」の本質があります。

【人物それぞれについてⅣ土地の何某】

○漁師です。最終稿（注・「B」のこと）には登場しない鰻漁に従事する男（鰻掻きの男）と同様、世俗の「俗」なる部分を代表しています。

○身は軽く、軽薄な人物というべきですが、「風がやんだら行けばよい」というのは常識であり、「ひとつ渡つてみるか」という好奇心も人情というべきです。

○幕開きと幕切れにおいて、こっけいな発言・仕草を担うべき「鰻掻きの男」が消えた現状にあつては、この男にそれを担ってもらわないと、シリアス一本の振幅のないドラマになってしまいます。沼に向けて「悲劇的に」転落、などということにならないようにお願いします。

※更なる疑問の点があれば、渡部まで直接お訊ね下さい。